

# 私のケースメソッド

田中節雄\*

## 1. はじめに

本学部の「ケースメソッド」は学部創設に際し当時の理事長がアメリカの大学から取り入れた一つの教育方法である。元々は「講義や演習によって学んだ理論を具体的な事例に適用して考察する」方法を指していた。

私は最初期からこのケースメソッドを担当しているが、初めの頃は、この導入時の理念に忠実に授業を組み立てようとしていた。

私の専門は教育社会学であるが、「講義や演習によって学んだ教育社会学の理論を具体的な事例に適用する」とはどういうことか、学部で勤務し始めてケースメソッドの授業を実際に始めるまでの数年間、その答えが見つからず困っていた。

結局「理論を学び、それを事例に適用する」という発想は、実際には無理があるということが分かった。教育に関する理論を学んだところで、その理論を直接当てはめることができる事例を探すことは難しい。仮に事例があったとしても、一つの事例を的確に分析したり解釈したりするためには「理論」をよほど深く学んでおく必要があるが、ケースメソッドを受講する学部の3年生にそれを期待することは非現実的であった。

そこで、私が実際に行ったのは「理論はともかく、実際の具体的な事例を提示して、それについてさまざまな角度から議論し、事例が含む問題について洞察を深める」という授業であった。

## 2. 初めの10年(1989~1998)

今述べたやり方をより具体的に書けば次のようになる。すなわち、実際にあった事件や本などで紹介されている事例と私自身の体験などを織り交ぜて、私が4000字程度の短い物語を作る。学生はそれを授業の中で読み、その問題をさまざまな視点から論じたり検討したりする、という授業である。

授業で扱ったテーマ(事例)は次のようなものである。

- ① つまらない大学生活：入学後無為な生活をしている大学生
- ② いじめ：中学のクラスでいじめられている女子生徒
- ③ 私立中学受験：受験勉強で余裕のない生活をしている小学生
- ④ 暴君の高校生：家庭でわがままに振舞っている高校生

---

\*人間関係学科 教授

⑤不登校：学校生活が息苦しくて不登校になっている中学生

授業の初め10分程度各自で事例を読み、その後5、6人ずつのグループを作り、30分程度グループでさまざまな問題を話し合ってもらった。

物語の中には現代日本の教育に関わるさまざまな問題が埋め込まれていて、物語を読んだ学生は各自の関心に従って多様な論点をそこから抽出することができるようになっている。

例えば「つまらない大学生活」の場合は「受験中心の高校生活」「将来の生き方を考える経験をしていない高校生」「高学歴社会の日本」「偏差値に振り回された進路選択」「学生の現状と適合していない大学の指導体制」といった事柄が少しずつ描かれている。

また「いじめ」では「いじめられやすいタイプの生徒」「いじめに対する教師のさまざまな対応タイプ」「いじめる側の子どもの言い分」「いじめられた子の心理」などが描かれている。

グループで話し合うに当たって、私は学生に次のような注文を出した。

- ①授業の目標の一つは「どんな問題についても、自分なりに考えて自分の意見を述べること」なので、「自分の考えが正しいかどうか」を気にすることなく、とにかく自分なりに考えたことを発言すること。
- ②逆に、どんな人の意見にも誠実に耳を傾けること。「自分とは全く異なる考え方」でも「明らかに誤りだと思える意見」でも、決してバカにしたり無視したりすることなく、謙虚な気持ちで聞き取ろうとすること。
- ③話し合いの目的は、普通の話し合いとは違って「グループで統一した一つの結論を出すこと」ではなく、むしろ逆に「一つの問題について人間の考え方はいかに多様であるか、を身を持って味わうこと」であるから、「意見をまとめよう」としないこと。

この注文は学生にとって結構難しい注文だったようで、私が黙って放置しておく、話し合いはついつい「統一的な見解」を生み出す方向へ進みがちだった。

30分ほど話し合った後、そこで出た多様な意見を代表が黒板に箇条書きした。それに10分ほど掛かるのが常であったが、その時間は、他の学生がリラックスしてさらに自由に問題を話し合う時間になっていた。

板書が終わると、私がそれを読みながら必要に応じてコメントをつけたり、学生に問いかけたりしながら問題を受講生全員で共有するというを旨とした。

以上のようなスタイルを10年ほど続けた。学生の反応は比較的良かったのだが、私自身が若干飽きてきて、もっと別のやり方をしたいと思うようになった。

### 3. 最近10年（1999～現在）

以上のような経緯の後、この10年ほどは受講生が何らかの意味での教育の当事者にインタビューをして、その内容を報告する、というスタイルをとっている。

「幼稚園」「小学校」「中学校」「高校」「大学」あるいは「生涯教育施設」「インターナショナルスクール」「学童保育施設」など、どんな場のどんな人でも構わないので、とにかく教育の当事者に自分（たち）が関心のある教育問題について可能な限り深く聞き取りをすることを課題としている。

教育問題の例としては次のようなものがある。

「幼稚園教諭からみた幼児教育の問題」「学童保育の現状」「ゆとり教育の問題点」「中学校の校則」「高校の進路指導」「高校教師から見た最近の高校生の問題」

受講生の母校を訪問して親しかった先生にインタビューするという方式が多いが、自分が中学生や高校生のときに生徒として生徒の目線で見えていたのと違った観点からの話が聞けて、学生にとっては大きな発見をすることがしばしばのようである。

#### 4. 今後

今後も、当分は現在の授業方法を続ける予定であるが、いくつか自分なりに問題点も感じている。

- ①インタビューを行う前に学生が関心を持った問題についてあらかじめ知識を深め、考え方を磨いておく必要があるのだが、それが十分にできていない。そのために質問がどうしても通り一遍のものになりがちで、「突っ込み」が足りない。
- ②そのことと関連して、インタビューの技術についてあらかじめ勉強しておいた方がいいのだが、その時間がない。通年授業であればその時間がとれるが半期授業ではその時間がない。

「授業評価」などを見ると学生の反応もいいので、基本的にこの方法を続けたいと思っているが、以上のような問題点を少しでも解消できるような策を考えることが今後の課題である。